

# 描かれた町と村



- I 町と村の小宇宙
- II 村を超える眼差し
- III 描かれたなりわい 桶川臙脂
- IV 描かれた幕末 和宮下向と桶川宿
- V 近代の設計図〔地図〕
- VI 時を見つめる眼差し

## 〔展示期間〕

**令和2年2月16日（日）～3月22日（日）**

平和が続いた江戸時代。現代の桶川市につながる地域の姿が形づくられていった。

江戸時代の町や村に生きた人びとは、たくさんの出来事を記録して後世に伝えている。その中には、人びとの生活の舞台となった町や村を描いた絵図が含まれる。

今回の展示では、古絵図の展示とともに、絵師が描き、世の中に流布した浮世絵や古地図などの絵画資料を加え、これらを描き、必要とした人びとの世界観を表現する。

## I 町と村の小宇宙

江戸時代の社会は「村」を基礎として成り立っていた。村とは、幕府や大名、旗本の領地として支配されながら、人々の生業の場であり、人生や信仰にかかわる小宇宙であった。

村は人びとの自治によって営まれ、さまざまな記録とともに絵図が描かれている。

現代に生きる私たちは、先人が描いた村絵図をとおして、村や町の姿と暮らしの移り変わりを知ることができる。

### 舎人新田村古図



舎人新田村は、江戸初期に沼地を拓いた新田である。集落は深田に沿い、水利施設が詳細に描かれ、村の来歴を物語っている。

### 桶川宿古絵図（部分）



### 武州足立郡下川田谷上分下分麓絵圖

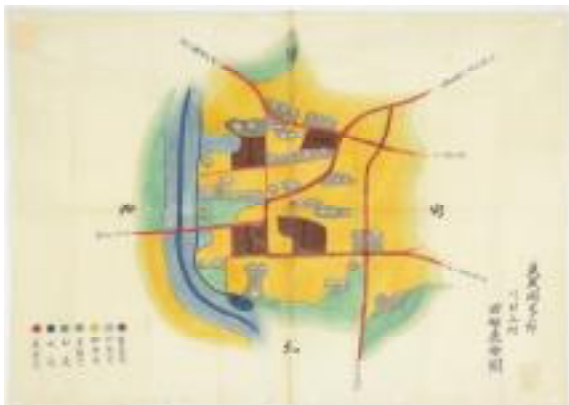


川田谷地区の南部にあたる下川田谷村上分及び下分を描く。天保7年（1836）に関東取締代官に上申されている。

### 桶川宿絵図（部分）



### 武蔵國足立郡川田谷村田畑麓繪圖



幕末にあたる安政2年（1855）7月に作成されたもので、前領家村と天沼村が描かれている。生活の場であった村の姿が詳細に描かれている。

「桶川宿古絵図」は、本陣家（府川家）に伝来したもので、この古絵図には、宿の入口に木戸や一里塚、そして寺社が明確に描かれている。

桶川宿では元禄7年（1694）に検地が行われており、隣村との境界を定め、宿村における土地の所有を記録するために描かれたのであろう。

「桶川宿絵図」は、脇本陣家（武笠家）に伝えられたもので、文政元年（1818）に作成された。宿の中心に本陣と高札場が描かれ、一方、木戸の記載は消えている。

中山道の路上にある「市神」の描写に注目したい。今に続く桶川祇園祭もこの市神の祭礼として始まった。

## II 村を超える眼差し

江戸時代後期、人びとの世界をとらえる眼差しは拡大していく。

例えば、紅花の取引は上方との交流の中で行われ、経済力をつけた庶民は社寺参詣にでかけている。

人びとの村を超えた世界へのあこがれをうけて、高度に発達した木版印刷による書画が世間に供給され、その視界を世界へと広げている。

### 岐阻街道 桶川宿 曠原之景



溪斎英泉が描く中山道の連作浮世絵。

桶川宿近傍の広々とした田園風景を描く。

### 茂右衛門の旅日記



米麦や紅花を商う在郷商人であった伊勢屋茂右衛門は、弘化3年（1846）12月26日から翌年3月1日の間、伊勢皇大神宮、金比羅社、善光寺を参詣した。

自ら記した旅日記には、天下の険として知られた箱根峠の絵が添えられている。

### 富士見十三州輿地全図



天保13年（1842）に刊行された富士山を望むことのできる十三の州（国）を描く大型の絵図である。

江戸時代後期、関東を中心として富士信仰が大いに流行し、人びとは富士講に参加し、先達とともに富士登山を行った。

富士と各州の形は地図として正確さを備えており、近代地図の萌芽をみることができる。

### 三国通覧輿地路程全図



林子平が著した『三国通覧図説』に付されている地図の1枚で、天明5年（1785）に刊行された。

林子平は、ロシア帝国の南下に警鐘をならし、鎖国下の日本が近隣の国について知る必要性を唱えた。

「三国」とは蝦夷・朝鮮・琉球をさし、海防の観点から地理や風俗についても解説している。

### 江戸大節用海内蔵



文久3年（1863）に刊行された用字用例辞典。

節用集は江戸時代後期以降、読者の知的好奇心に応じて図を増やし、本書には日本だけではなく、世界の地理についての図も収録されている。

### III 描かれたなりわい 桶川臙脂

江戸時代の人びとは、自らに与えられた仕事を貴ぶ気風に満ちていた。日々の生業をとおして学び、そして交流する。

江戸時代後期、天明から寛政年間に最上紅花の種が江戸商人によって桶川にもたらされ、桶川臙脂の名で知られた紅花の歴史は始まる。紅花の時代を伝える資料は数少ないが、ここに展示する資料は、紅花をめぐる立ち働く人びとのいぶきを今に伝えてくれる。

今様美人拾二景 しんきそう



溪斎英泉による連作美人画の一枚。愛宕山の景を添えた美人の下唇は玉虫色に輝いている。

この化粧は、「笹紅」といい、高価な紅を唇に幾重にも塗り重ねたぜいたくなもので、江戸の風俗を表している。

桶川宿商家店先絵馬 桶川市指定文化財



溪斎北尾重光によって描かれたこの大絵馬は、文久3年（1863）に、上州館林の米屋勝右衛門と近江商人である小泉榮助ならびに利七が、桶川宿の布屋庄左衛門の屋敷神に奉納したものである。

袖蔵前では「桶川臙脂」の名で広く知られた紅花の荷駄が馬の背につけられようとしている。

紅花は、京に出荷されて桶川宿に富をもたらした。

紅花屏風右隻 （複製 原資料：財団法人山形美術館蔵）



京の高名な絵師である横山華山が、京で紅花問屋を営んでいた伊勢屋理右衛門からの依頼を受けて、文政6年（1823）に描いた六曲一双の屏風の右隻である。左隻の絵は奥州の紅花を、右隻は武州のそれを描いたと伝えられ、ともに労働と人物を活写した名作である。

伊勢屋理右衛門は、桶川の紅花をいち早く買い付けた商人としても知られている。

## IV 描かれた幕末 和宮下向と桶川宿

嘉永6年（1853）の黒船来航は、「太平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船） たった四杯で夜も眠れず」の狂歌のとおり、人びとに大きな衝撃を与えた。

さらに、安政2年（1855）に発生した安政江戸大地震がもたらした社会不安の中で幕末の動乱が幕を開けた。江戸時代の大動脈であった中山道桶川宿は、文久元年（1861）、中山道の歴史の最後を象徴する大通行であった和宮下向に向き合うことになる。

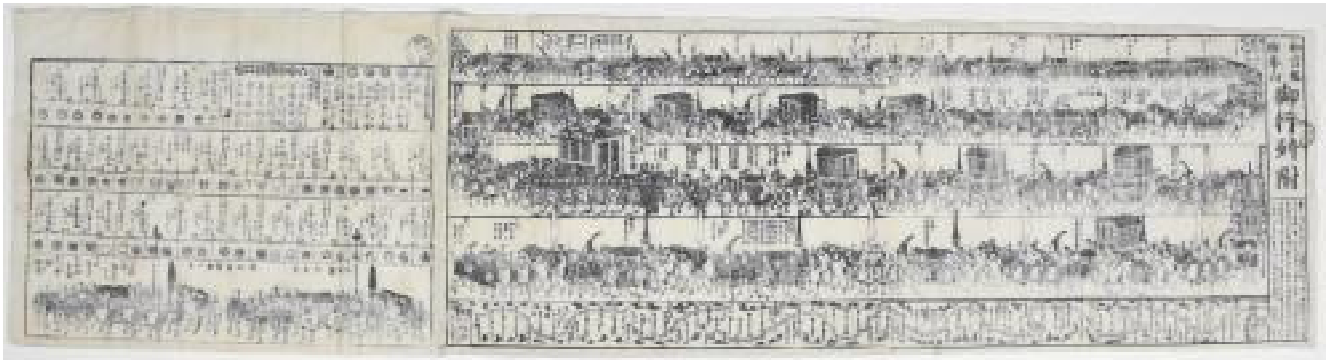
### 鯰絵

幕末の動乱は、開国による社会の混乱と天災の中で幕を開ける。

安政2年（1855）10月に、江戸は安政江戸地震に見舞われている。混乱する社会への風刺として、地震を起こすという鯰を描いた絵が大量に発行された。図は「おつづれば節」を歌ってうかれる鯰の姿を描く。



### 和宮様御参向御行列附



### 和宮様御参向供奉御行列附



皇女和宮は、公武一和を具現するために第14代将軍徳川家茂に降嫁することになり、文久元年（1861）に中山道を江戸へと向かった。

その旅は、中山道の歴史上、最大の大通行であり、人びとの関心を集め、行列の姿を伝える瓦版が何種類も売り出されている。

### 桶川宿本陣古図（部分）

桶川宿は、和宮の宿泊と行列の継立てを担い、これを成し遂げている。桶川宿本陣府川家に伝わる本図には、改装部分や建物の用法が正確に記され、湯殿の外の警備や水汲み人の配置まで読み取ることができる。

ここに宿泊した和宮は、文久元年（1861）11月14日の早暁、江戸に向けて発っていった。



## V 近代の設計図〔地図〕

明治維新を経て、明治2年（1869）の版籍奉還をきっかけに分権的な支配体制である幕藩体制から中央集権国家の建設が進む。

政府は、地図を近代国家の設計図としながら国の姿を把握し、軍事や税制の基礎を固めていった。

明治6年（1873）の地租改正令による「地租改正地引絵図」と、陸軍によって明治13年（1880）から作成が始まった「迅速測図」（複製）を展示する。

第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖  
覆刻版



陸軍参謀本部陸地測量部によって明治19年（1886）に完成したフランス式の彩色地図である。

地図には、縮尺20000分の1をもって当時の関東地方が図示されている。

地租改正地引絵図（桶川宿東半部）



本資料は、明治11年（1878）3月に桶川宿戸長役場が作成した「地租改正地引絵図」である。地租改正法のもと、戸長役場は一筆ごと土地丈量（測量）を行い、一分を一間に見立て、すなわち600分の1縮尺で地租改正地引絵図を作成した。

これによって、国民が所有する土地が確定され、近代国家の国税の基礎となる地租が課税された。

## VI 時を見つめる眼差し

旧桶川宿にあって旅籠の伝統を引く旅館業を営んでいた武村徳松氏は、明治23年（1890）に東京府下の板橋に生まれ、青年期に桶川に移り住んだ。

徳松氏は、旧制中学に通う中で水彩画に出会い、明治から昭和へと続く暮らしの中で水彩画を描き続けていた。徳松氏のまなざしをとおして描かれた桶川の風景は、近代人の心象表現であった。



水彩画「鍛冶橋」大正2年



水彩画「浅間横丁」大正4年



水彩画「無題」昭和18年

### — 終わりに —

今回の企画展を開催するにあたり、貴重な資料を出品していただいた市民の皆様、ご指導をいただきました機関ならびに研究者の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

秋山一 岩田好則 小高士郎 武村祐介 府川和子 増田豊明 山口秀美 杉山正司 橋本富夫

[順不同、敬称略]

令和2年2月 桶川市歴史民俗資料館館長